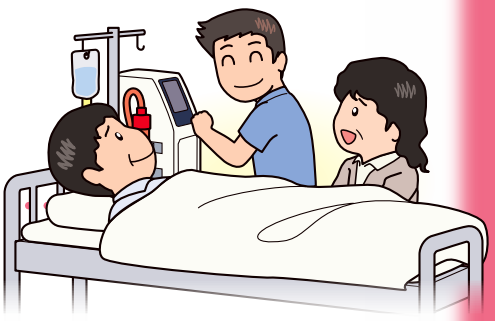
優秀賞（一般部門）　阿川 弘之

家族と私を紡いでくれた臨床技士の方へ

私が突然病魔に襲われたのは平成27年の年末でした。病名は劇症型心筋炎でした。私の体は多臓器不全に陥り人工透析をしなければならなくなりその時にお世話になったのが臨床工学技士の方でした。この方はいつもそばにいて下さり、色んな話をして励ましてくれたり何よりも私の病気に対しての妻の心配を和らげてくれたりしていただいた事に非常に感謝しています。またある時、違う臨床工学技士の方でしたが私がICU（集中治療室）に居る時機械の調子が悪くなり自宅から急いで駆けつけてくれて対処してくれたのを覚えています。

一般病棟に移動してもICUで担当してくれていた臨床工学技士の方が心配してよく顔を見に来てくれました。心強かったです。その時の話で「いつも心配していただいて有難うございます」と言うと「そんなことはないです、一番心配していたのは主治医の先生でしたよ」と言われました。確かに思い出すと主治医の先生は毎日何回も顔を見に来てくれたのを思い出しまいした。それだけではなく、心エコーの先生や外科の先生、麻酔科の先生（毎回手や足をさすっていただきました）レントゲン技師、精神科の先生、看護師長さん（一般病棟で勝手に出歩いてよく怒られました）看護師、看護師助手の方、いろんな方が見守ってくれて話しかけてくださった事を思い出しました。



病院はチームで動いている。一つの命を守るためにいろんな力を終結させて命を守っていると気づきました。それも担当の臨床工学技士の方と色々仕事のお話をして気づいたことかもしれません。そして臨床工学技士は透析だけでなく色々な場所で活躍しているのも知りました。まさに生命のエンジニアです。これからはこの助けていただいた命を大切にし、また若い子や学生と話す機会があれば臨床工学技士という生命に携わる大事な仕事があるよと陰ながら伝えていきたいと思っています。

https://ja-ces.net/jinzai/